
茨に咲く君と

奏多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茨に咲く君と

【Nコード】

N0273BA

【作者名】

奏多

【あらすじ】

前世をなによりも尊ぶ国アロイス。そこでは前世で縁があつた相手を伴侶に迎えることが最高とされている。ただし、そのためには前世が正しいものであるということを、司祭達の行う『審判』という術で証明されねばならない。

その審判結果を理由に、アーシャは顔見知りの地主ロンハに拉致された。もちろん彼女は逃げ出したが、途中で司祭エクレシスに出会う。訳を話してロンハが不正をしたに違いないと訴えたアーシャだったが……。

第一話

思い出すのは茨に咲いた白い花。

指の痛みをこらえながら棘を摘み、闇にまぎれて一輪だけ袖の中に隠した。

く　＊　く　＊　く

窓の下は、茨の這う垂直な煉瓦の壁だ。地面の様子は夜の闇に紛れてよく見えない。

そしてアーシャは木綿の簡素な寝間着を着ただけで、木靴さえ履いていない。赤茶の冴えない色の髪だけは、絡まないようリボンで結んでいた。

普通なら、部屋の外に出ることさえためらう格好だ。

「だからって、大人しくしてられないもの」

アーシャは自慢の頑丈な歯で、食いちぎるように寝台のシーツを破る。それを両手足に巻き付け、いざ窓枠を乗り越えた。

太そうな茨の蔓に足をかける。

蔓はしなりながらも千切れたりもしない。布を隔てても茨の棘が足裏や手のひらをちくちくと刺すが、我慢できなくはなかった。

いける。

アーシャはそう判断すると、急いで茨をつたって暗い地上へ降りた。

よもや窓から脱出するとは思わなかったのか、降り立った館の庭に警備の人間はいないようだ。ほっとしたアーシャだったが、

「あ、こらアーシャ！」

二階の窓が開いて、中から叫ぶ人影が見える。

クセのある茶色の巻き毛をした青年。彼は貴族風のジャケットにひらひらとしたクラヴァットを身につけている。彼こそがアーシャを攫い、自分の屋敷に閉じ込めた本人、この周辺の地主であるロンハだ。

「一体何が不満なんだ！」

「全部に決まってるでしょう！　こんな誘拐みたいな真似されて、結婚するわけないじゃない！」

捨て台詞を残しアーシャは走り出す。棘に刺された足が痛んだが、かまっていられない。

ここにいたら、数日後にはロンハの妻にされてしまうのだ。

ロンハはついこの間まで、貧乏牧場の小娘とか、みずばらしいさび色の髪だなんだと、顔を合わせる度アーシャに悪口を言ってきた人間なのだ。

しかも一ヶ月前、アーシャの両親が所有している丘を売るよう交渉しに来て、追い返されている。丘が欲しいがためにアーシャと結婚するつもりに違いない。

そう疑ったアーシャは簡潔に「お断りします」と答えた瞬間、ロンハに攫われ、婚礼の日までゆっくり滞在してくれと館の一室に閉じ込められてしまったのだ。

しかも本来なら親がアーシャを返せと言いにきてくれるはずだが、それを期待するわけにはいかない理由がある。

「前世を思い出したなんて、絶対嘘よ……」

このアロイス王国は、前世の記憶を持つ者が尊ばれる。

時と運命の神ラトレイアの恵みが深い証明、とされるからだ。

そのため前世を思い出した者が、前世で縁あつた者との婚姻や養子縁組を望んだ場合、司祭達の承認を得てしまえば、身分差があるうと誰も異論をとえられなくなるのだ。

ロンハは前世を思い出し、それを司祭の秘術である『審判』によつて検証し、承認されたと言つていた。反論すれば、神さまの意志に反したと周囲から責められるだろう。

これを覆す方法は、実は一つしかない。アーシャも『審判』を受けてロンハが嘘をついていると証明することだ。

が、アーシャには審判を避けたい理由があつた。

そのためアーシャは次善の方法として、王都の祭司府へ行き、中央にいる司祭にワイロで審判をねじ曲げたことを告発しようと考えたのだ。

森のように広い庭を駆け抜けたアーシャは、ようやく館を囲む塀までたどりつく。ここも防犯対策が単に生息地だったのか、塀にはこれでもかと茨が這つていた。

茨は嫌いだ。嫌な夢には、必ず出てくる。

けれど今はそんな理由で尻込みするわけにはいかない。茨を利用して塀の上まで登つたアーシャは、

「しまった」

塀の向う側には茨がなかった。

高い塀の上だ。飛び降りたら骨折ぐらいはしそうな気がした。

恐くて、塀の上にしゃがみこむような体勢のまま動けなくなった。その時、遠くから騒ぐような声が聞こえてきた。だんだんとアーシャのいる場所へ近づいてくる。

迷つてゐる場合じゃない。やらなければ。それに後ろ向きな思惑だ

が、骨折したら完治するまでは結婚話も延期されるはず。

（飛べっ、アーシャ・リネイス！）

アーシャは心の中で叫び、自分を鼓舞した。
そして思い切って塀から飛び降りる瞬間、

——地上に月が落ちてる。

そう思ったのは、黒い衣服を纏ったその人が綺麗な金の髪をして
いたからだ。

「あぶなっ！」

ぶつかってしまつと叫んだアーシャは、他人様を蹴り倒す大惨事
を想像して背筋が凍る。

が、その人は慌てず、しっかりとアーシャを受け止めてくれた。

相手に怪我をさせなかったことにほつとして、アーシャは胸をな
でおろしてお礼を言おうとして——彼の顔から目が離せなくなる。
月色の髪をした青年が、目を見開いてアーシャを見下ろしていた。
白皙の頬をした秀麗な顔立ちの中、南天に輝く星のような銅色の瞳
が印象的な人だ。

アーシャよりも数歳上だろうその人に、瞳が吸い寄せられたまま
離れなくなる。どこか懐かしい気持ちにさせられる、月色の髪が風
に揺れている。

呆然としていたアーシャだったが、ふと彼の服に気づいた。

「司祭……様ですか？」

黒い詰め襟の上着と下衣に、黒に銀系のクロークを纏うのは司祭
の正装だ。銀の留め金には、茨が彫り込まれている。

しかし青年はアーシャの問いかけに答えない。

彼も何かに驚いたようにアーシャの頭を凝視していたのだ。
が、やがて我に返ったように地面に彼女を降ろしてくれた。それからアーシャの髪に絡んでいたのだろう、茨の葉と花弁をそっと取り払い、ようやく答えてくれる。

「確かに私は司祭職にある。王都へ戻る途上で通りがかったんだが、一体……？」

なんて幸運！　と思いながら、アーシャは息せき切って頼み込んだ。

「お願いします司祭様！　ここの土地の司祭がワイロをもらって審判をねじ曲げようとしてるんです！　なんとかしてください！」

両手を祈るように握りしめて見上げると、困惑した様子だった青年が眉をひそめる。

「審判をねじ曲げていると？」

「この辺で一番の地主のロンハって男が、結婚でうちの土地を自分の物にしようとしてるんです。このままじゃ、偽の審判結果で結婚させられちゃうんです！」

アーシャはこれまでのいきさつをかいつまんで説明した。

おおまかな話を聞いた青年司祭が、少し思案した上で何かを言うとした時だった。

「見つけたぞ！」

大声を上げ、松明を持たせた従者と黒衣の老人と共に走ってくる者がいた。ロンハ達だ。

「我が麗しの花嫁よ、機嫌を直してくれ。私達の愛の巢へ戻ろうではないか」

「結婚するつもりはないって言ったでしょ！」

愛の巣ってナニ！？ と、気持ち悪さに背筋がぞつとしたアーシヤは、反射的に怒鳴ってしまう。が、ロンハは余裕の笑みを浮かべたままだ。

「婚儀の式には君の両親も呼ぶんだぞ？ 先ほども挨拶に来てくれて、泣ながらに娘を頼むと言っていた。婚礼までちゃんと君を預かるからと約束しておいたからな」

ロンハの言葉に、アーシヤは思い切り顔をしかめてみせた。

「嘘つき！ 誘拐犯！」

「何を言うか。審判は神聖なもの。私の審判結果を司祭殿に説明いただいて、ご両親も納得しただけのことだが？ なぁグレブ司祭殿」
「それはもう。ロンハ殿の審判結果によりアーシヤ殿がご縁のあった方だと判明したと話しましたら、ご両親も納得して帰って下さったですよ」

一見すると好々爺にしか見えない老司祭グレブが何度もうなずく。

アーシヤは唇を噛みしめた。

司祭から直接審判の結果だと告げられたら、引き下がるしかないではないか。

「では、審判を受けたのはその男だけで、この娘は受けていないのだな？」

唐突に話に割って入った青年司祭に、ロンハが眉をひそめた。

「そちらはうちの花嫁に何の用ですかね？ 着衣から司祭殿のようだが」

「この娘から、審判に疑いがあるとの告発を受けている。この案件は私が預からせてもらうこととする」

「し、しかし祭司府所属の者でなければ、司祭の審判に対する審査

権はないはず……？」

首をかしげるグレブ司祭に、エクレシスは堂々と言った。

「証明ならここにある」

そう言つて青年司祭は、懷から小さな巻紙をとり出した。

いや、紙ではない。布だ。

厚手の布は、縁が金と朱の糸で縁飾りがどこされ、中央に文字が金と緑の糸で綴られている。水に濡れようともし決して文字が消えぬよう、特別に設えられたその布書簡には、紅の翼持つ竜と太陽を意匠化した紋章が縫い取られている。

どんな聖堂にも刻まれているからアーシャにもそれが何なのかわかる。

天上の王と呼ばれる祭司王の紋章。

このアロイス王国に住んでいる以上、幼い頃からこの紋章と共にたたき込まれている言葉がある。

国王は地上を統べる王。

けれど精神は天上の代理人である祭司王に従うべし、と。

「私は祭司府の枢密院顧問官エクレシス。この娘アーシャの訴えにより、私が祭司府にて『前世法』に基づく審判を担うこととする」
「す、すうみついん！？」

ロンハは呆然と口を開けたままエクレシスを凝視する。

そしてアーシャは、青年司祭エクレシスの意外な正体に、反論することも忘れ、呆然とその顔を見上げることしかできずにいた。

第二話

アロイス王国には、国王と並ぶ権力を持つ者がいる。それが国教の守護者である祭司王だ。

時と運命の神ラトレイアの奇跡を操る力を持つ者が司祭の資格を得るが、その中でも強い奇跡の力を持ち、一定の条件を満たした者が、枢密院にて選出されることになっている。

エクレシスはその、祭司王を選ぶことのできる枢密院顧問官だというのだ。

「本来なら管轄の司祭の仕事に割り込むには、様々な手続きがいるだが、私にはその権限がある」

堂々と自分の権力について語る彼の言葉に嘘はない。枢密院顧問官ならば、各地域に派遣される司祭達を統括する立場の人間だからだ。

周知のことをわざわざ口に出しているのは、エクレシスがアーシャの不安をとりのぞこうと考えたからだろう。

自分が必ず審判をとりおこなって、アーシャの嫌がる結婚の無効を証明してみせると。

審判により証明された前世の縁を理由にされた場合、教義に反するため断りにくい。そのため、ロンハが『審判を受けた』と主張する以上、アーシャに婚姻を迫っても誰も止められない。

だから司祭を抱き込んでいるロンハの申し出を拒否するには、彼らの嘘を暴かなくてはならないのだ。

そのためにエクレシスは審判を行うと言っただが、

「なのに何故君は、審判を嫌がる？」

真剣にアーシャの訴えを聞き入れたからこそその疑問に、アーシャは口が重くなる。

なかなか話さないアーシャに、エクレススは呆れた様子もなく、アーシャを背負ったまま歩き続けた。

茨を伝って壁を上り下りしたアーシャは、思ったより手足を怪我していたのだ。

とりあえず詳しい説明を聞きたいという彼を、夜も遅いから宿へ案内しようとしたアーシャは、痛みで歩けなかった。そこでエクレススが彼女を背負ってくれた。

アーシャは申し訳なくてたまらない。

司祭として地位の高い人なのに、初対面のアーシャの訴えを聞いてくれるほど、職務に真面目な人なのだ。

でも、そんな人だからこそ言いづらかった。

ぐずぐずとしている間に、エクレススは宿へたどりつく。

顔見知りの女主人は夜半に訪れたアーシャと青年の組み合わせに驚いたが、意味ありげな顔をして部屋へ案内してくれた。

「話の前に、傷の手当てだな」

部屋に入ると、エクレススはアーシャを部屋の隅にある寝台に座らせ、手足の傷の手当てをしてくれた。

ぐるぐるに巻いていた布をとり、女主人に頼んで貰った水で洗い流し、薬を塗ってくれる。

「ありがとうございました」

手当てが終わると、アーシャは深々とエクレススに一礼した。

司祭は多少は医療も担うとはいえ、枢密院の顧問官なんて偉い人の手をわずらわせてしまったのだ。恐縮するアーシャに、エクレススは「気にするな」と言いながら、アーシャと向かい合わせになる

場所に、椅子を持ってきて座る。

「さて、なぜ審判を受けられないのか、話して貰おう」

再度の追求に、アーシャは抵抗をあきらめた。

そもそも、エクレスに助けを求めたのは自分だ。審判を受けるのが一番良い方法だというのもわかっている。

ただ神の意志の元、過去を尊重して生きている司祭である彼に話したら、怒られるのではないかと思うと恐かった。

「……怒りません？」

だから叱られた子供のようなことを聞いてしまった。

「信者の告解を聞いて、怒る司祭など聞いたこともないが」

エクレスはそう答えてくれる。けれど怯えているアーシャは、淡々とした口調すら恐いと感じていた。

「それもそうですけれど……」

「怒られそうな理由なのか？」

「多分、そうかなって」

「ならば決して怒らないと約束しよう。とにかく聞かなければ対処法も考えられないからな」

はつきりと言ったエクレスが、アーシャの手に触れる。

いつのまにか膝上で手を握りしめていたことに気付いたアーシャは、エクレスの手の温かさに顔を上げる。

エクレスは冷たい月のような無表情さではなく、望月の光に似た柔らかな笑みを浮べていた。

「心配することはない。私は司祭として何人もの前世を見てきた。その中には大罪を犯した者もいた。そのことを恥じて泣く者は多い。

けれどその罪を恐れてはいけないのだ。それを補うために未来が、現在がある」

語ったエクレシスは息をついて続ける。

「アーシャ。君の杞憂が同じ理由かはわからない。けれど前世と神の奇跡に関わることは、知らずにいる人間には常に不安なものなのだ。司祭という職にある者は皆、それをきちんとわかっている」

真摯に語りかけてくれるエクレシスに、アーシャはようやく決意を固めた。

「そう、なんです。あたし……こわいんです」

ぼつりとこぼせば、言葉はどんどん溢れてきた。

「五歳の誕生日に、みんな司祭様の祝福を受けるじゃないですか」
子供が順調に成長していくよう、ラトレイア神の祝福を授かる儀式がある。

その祝福を受けると『審判』のような術ほどではないが、ラトレイア神の力の影響で前世をわずかに垣間見る者がいるのだ。

普通なら『神の恵みの深い子』として本人も家族も喜ぶような事だが、

「あたしは前世の記憶を見て、泣き叫んだんです」

恐怖で記憶がほとんど打ち消されてしまっているが、わずかに何を見たのかを覚えている。

散らばる茨の花弁。

白い花が、血を浴びて深紅に変わる様。

体を棘で刺される痛み。

「恐くて、聖堂へ行くのも一時は泣いて嫌がったから、神の力を拒

否するなんてと親にはひどく叱られました。今は聖堂に行くのは恐くないんです。司祭様も恐いとは思いません。だけどまだ……覚えてるんです。それを見せた神さまの力が恐くて」

また、同じ思いをするのは嫌だ。審判を受けたら、もっとひどいものを見なければならぬかもしれない。

それが怖い。

思わず手に力が入る。が、そこで握っているのがエクレシスの手であることを思い出し、アーシャは慌てて離す。

「あ、ごめんなさい、痛くなかったですか？」

「いや、女性の力で握られても、さして痛くはない」

「でもあたし、斧でいつも薪を割ってるし、山羊とか引きずって歩くこともあるし、王都に住んでいるお嬢様みたいに、か弱くないですし」

「棘の怪我は痛まないのか？」

言われてアーシャは微笑んでみせる。

「多少ちくちくするぐらいですから。足よりは痛くないです」

「そうか？ ああ、ここにも傷があったな」

エクレシスは呟くように言って、アーシャの頬に手を伸ばす。耳のすぐ近くに指が触れた。確かに傷があったのだろう。わずかな痛みとともに首筋を震わせるような感覚がはしり、アーシャは肩を震わせた。

「痛んだか？」

問うエクレシスにどう言っているかわからず、アーシャはうなずく。

エクレシスはアーシャに塗り薬を渡した。

「塗ったら、もう今日は休むといい」

わかりましたと答えようとして、アーシャは首を傾げる。

「あの、家に帰りますよ？　ここは司祭様がおとりになられた部屋ですし」

「問題ない」

短く答えたエクレススは、扉を叩く音に立ち上がり、宿の女将から物を受け取った。

一つは女物の靴で、寝台の側に置いてくれる。枕元には女性物の服。寝間着に裸足で脱走したアーシャのために女将に手配を頼んでくれたのだろう。

最後に残ったのは毛布だ。

椅子を木枠の窓辺に置くと、エクレススは毛布を自分で引き被り、そこに座った。

「私は座ったままでも充分眠れるからな。気にしないでくれればいい」

そう言って、彼は窓枠にひじをついて目を閉じようとする。

「ちよつ、あの、それなら私が……！」

自分を助けてくれる司祭に、そんな不便をかけるわけにはいいかない。

説得しようとしたアーシャの言葉を、エクレススは遮って言った。

「私も、前の自分の記憶を見るのは恐かった。だが恐怖を克服して全てを知ったおかげで、様々なことを学べたと思う。たとえば、保護すべき者から離れないことを」

アーシャを突然攫ったロンハが、また来ないとも限らない。

そのための警戒だと言われ、脱走したての上、確かにロンハがまたきたらと思うと恐かったアーシャは、素直に従うことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0273ba/>

茨に咲く君と

2012年1月1日22時49分発行